
勇者は魔王で人間で？

ハルジオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者は魔王で人間で？

【Nコード】

N9277Y

【作者名】

ハルジオン

【あらすじ】

一人の少年が学園に足を踏み入れる。それは本当はよくある『普通』の出来事のはずだった。だが、その少年は『普通』ではなかった。むしろ『普通』になれなかった。何故なら（血の繋がらない）魔神の子供にして（なりゆきで）魔王、しかも（偶然に）勇者だったのだから。

全ては未だ世に無く

「……なんと、汚らわしい」

『それ』を見た男は顔をしかめた。

「このような……このようなものが、我がディアヴール家の血を引く者とは」

冷えた部屋。

石を積んで作られた部屋を照らすのは赤い炎の松明。

男は、足元に平伏す女に視線を向けた。

その顔は赤く、怒りに満ち溢れている。

女は額を床にこすりつけかねないほど深く頭を下げていた。

「誠に申し訳ございません！」

女は、不自然なほど青白い顔をしていた。

体調が悪いのだと考えるのは当たり前だったが、男はそんな事を気にもしなかった。

そして女も、気にしないではいられない様子だった。

「当然だ。よりによって、銀だと？ 我がディアヴール家は代々金の髪と金の目、金冠の魔神様の恩寵を受けし柱の一つだぞ……」。

なのに銀？ 銀眼だと？ たとえ髪は魔神様に近い印である黄金だったとはいえ、銀は許されん」

「申し訳ございません！」

ずる、と額をこすりつける音。

血が出たのではないかと疑われるような音だった。
しかし女の声は悲痛だった。

男は台を見る。

石畳の部屋の床に、黒い色でえかがれた緻密な陣が敷かれていた。
ちょうど北の方角に、金色の石が置かれている。

その中央には白い台。

乗せられていたのは布に包まれた赤ん坊だった。

生後一ヶ月も無いのではないかというほどに小さく、肌も血に塗れている。

「このままでは我がディアヴール家は、ロウフェン家に魔神様の側に侍る権を握られたままではないか！ この売女が、悪魔の血を引く女が、家名に泥を塗りおつて！」

「申し訳ございません……申し訳ございません！！」

「グイネア家とはいえ許されんぞ！ 恥を知れ！」

男はそう言うってから、女を罵倒する言葉を荒々しく吐き散らす。

女は自分が、通常では考えられないような罵倒の言葉を受けても、
『自分が悪い』という様子を崩さなかった。

言われて当然、報いは受けるべき、という様子。

男は台に向けて手を差し出した。

「『溢れる水、走れ光。 我は金冠の魔神、煌月の恩寵受けし血を引く者』」

黒い陣、その模様を構成する直線、曲線、文字から青白い水が染み出す。

じわりと、だが陣を乱さない水は、陣の内側にのみ薄く満ちる。

「『此处に水鏡。 それは月を映す貴き鏡。 それは異なる場への

扉
」

水は青白く、発光。
黒い陣は金色の光に染まった。

「『此処に代償を。 代償は咎の肉、咎の骨。 いずれも捧げた代償』」

布——赤ん坊が、赤ん坊の右目が光る。
男の額に汗が滲んだ。
差し出した手が震える。

「『——今、扉は開いた』」

身体のあるとあらゆる毛穴が開いた。
同時に鳥肌が立つ。
これは畏れた。

今から途方も無い、通常では見る事が出来ない奇跡が始まる。

そして陣の中から湿気た濃い緑の香り。
それは何処か獣臭く。

「『対象と代償は同列。 何を欠いても、同じ。 ただ運べ、運べ

——運びたまえ!』」

光は、一瞬強く輝いた。
陣の中が見えないほどの強い光。
女は目を閉じる。

光が収まるのを瞼の裏に見て、女は目を開く。

「……ふん」

滴る汗を袖で拭いながら男は息を吐く。

男の荒い息が部屋に響く。

陣は光を放ってはいない。

最初とほぼ同じ状態。

だが、陣の中に台と金色の石はあったが、その上に乗っていた布と赤ん坊の姿は無かった。

まるで、最初からそこに居なかったかのように。

魔神は照れない

「——素敵でございますわぁ！」

黒いワンピースと白いエプロンを纏った女が、歡喜の声をあげた。

そこは陰鬱さとは無縁の、真つ白な部屋だった。

鏡のように磨きあげられた床と壁。

敷かれた絨毯は赤く毛も深く、調度品は一流の手によるものに見えた。

「坊ちやま、素敵でございますのっ！」

胸の前で自分の手を絡ませ、頬を赤らめる。

そんな女は小麦色の肌に鮮やかな赤い髪と藍色の目をしていた。

「坊ちやまをこんなにも素敵に仕上げる事が出来て……私も本懷を遂げ、非常に嬉しく思いますわぁ……それと同時に自分の腕を誇りに思います」

「……ただ、ちょっと髪を梳かただけじゃないか」

目尻に涙を浮かべしみじみと語る女に、少年は軽く頭を掻いた。

少年の少し長めの金色の髪が、瞼の上にかかる。

「どっちにしたって、眼の色は変えるし……」

「それでもございます。私は、坊ちやまの容姿に磨きをかける事が生きがいなのでございます。つまり、坊ちやまがたとえ突然女になられたとしても、突然人間をお辞めになられたとしても、坊ちやまの容姿に磨きをかけますわ」

「そうじゃなくて……」

少年は自分の姿を見下ろす。

白いシャツに黒い衿、紺のズボン。

衿から通すネクタイは黒く、シャツの胸の辺りに剣と杖、そして盾を組み合わせた紋がある。

どれも新しく作ったものばかりに見えた。

少年の首には、金で作られた月のペンダントがある。

月は金、だが鎖は白。

少年の髪の色に合わせたかのような白だった。

「この名札」

少年が示したのは衿に付けられた青い名札。

流暢な薄い黄色の文字で少年の名前が記されている。

「俺、確か黒が良いって言ったはずなんだけど……」
名札の色は五色ある。

青に黄字の名札、緑に白字の名札、黒に白字の名札、白に黒字の名札、金に黒字の名札。

少年は黒に白字の名札を望んだはずだったが。

「私の独断により、青に変更しました」

「なんでさ!？」

「何故なら坊ちゃまは、黒より青と黄——いいえ金がよくお似合いだからでございます。月の金と夜と青……」

胸を張って女は言う。

「本当は金に黒字がよろしかったのですが、断られてしまいました」
「そりゃそうだろ……金五家しか使えない名札だから」

「それはとても不自然な事ですわ」

「自然じゃないか？」

納得がいかないように女は顔をしかめる。

「坊ちゃま、坊ちゃまは自分の立場を本当に理解されていますの？
坊ちゃまは金五家よりとても優れたお方、もっと金を身に付ける
べきお方です。もっと自分に誇りをお持ちくださいませ」

「持つてるよ、勿論、ちゃんとさ。でも凄いのは俺じゃなくて母
上で……」

「——坊ちゃま」

真剣な眼で女は少年を見る。

そのあまりの真剣さに、少年は息を呑む。
今までとは放つ空気が全く違う……。

「母上ではなく、父上でございます」

その発言に、やや少年は沈黙。
そして。

「……え？ もう父上？」

少年の不思議そうな発言と共に、扉が開いた。
誰かの手によってではなく、勝手に。

「そう、今は父上だ」

豊かな低音がそこに響く。

そこに居たのは、絶世と言えるほどの美貌だった。

肌は陶器のように白く、肩まで伸びた波打つような髪はまるで満月
のような金色、目も全く同じ色に輝く。

汚れもすぐに目立ちそうな真っ白な衣服はまるでローブを重ねたか
のようで床を引きずるほど裾が長い。

少女が憧れる絶世の美を持つ騎士や王子とはまた違う——たとえば
支配者のような気配を持つ美貌の男だった。

その美だけで十分に権威の象徴。

誰もが跪ずき許しを乞うかのような。

男は少年を見るとゆるやかに口許を緩ませる。
……麗しい。

「やあ……息子。少しぶりだねえ」

腕を広げ素足のまま少年に近寄る。

素足だが、足音は一切しない。

エプロン姿の女は恭しく頭を下げると、道を譲るように退く。

「二日ぶり……父上」

少年はやや緊張したように答える。

「うん？　そうか、まだ二日か……」

男は少年のすぐ側に立つ。

少年の頭は、男の肩程度しかなかったため男は少年を見下ろす。

「背が、伸びたか？」

「まだ最後に会って二日しか経ってないのに、背が伸びるわけ、ない」

「む、そうか。昔は二日でこれほどは伸びたものだが」

『こんなに』と手で示したのは、幾ら成長期でも有り得ない幅だった。

「食べ過ぎで太っても、二日でそうはならないから」

「……難しいな」

大袈裟に男は考える。

「しかしたったの二日とは……、「俺」も無理をしたものだな。

何故かは考えずともよく分かるが」

「じゃあ、何故？」

「それは勿論……」

男は少年の顎に指を這わせる。

吐息すら聞こえそうな位置で囁きかけた。

「この父上である【俺】が息子の晴れ姿を見られぬなど……おかしな話だろう？」

「でも母上は最初届いた時に見てるから、父上も見た事になるんじゃないか……」

「我が眼で、直接見る事こそが最も意味があるだろう。違うか？」

もつと顔が近くなる。

唇が触れそうな距離だ。

溜息が出るくらいに、美しい。

「【父】と【母】は違う生き物だろう。ならば【父】と【母】はそれぞれ見なければなるまいよ。それとも、我が息子は【父】は嫌か？」

「そんな、父上を嫌いなはずが無いだろ！？」

「ならば父に見せよ、じっくりと髪の一筋一筋から足の爪先までをな」

ようやく顔を離した。

だが男は、言葉通りに少年を嘗めるように眺める。

「……ふむ、此処はやはり親として子に何か言うべきなのだろう。……」

わざとらしく大袈裟に自分の顎に手を当て、口を開く。

「虐められた時は、【俺】の名を告げるがいい」
自信があるように男は笑う。

その笑み。

普通の人間……でなくても、たとえ同性でも、見惚れてしまうほどのもの。

「父上の名前は言ってもあんまり効果が……」

「……【俺】の名を告げてても効果無いだと？」
有り得ない事を聞いたとばかりに眉が上がる。

「いや、そうじゃなくて言っても信じないよ。普通の人間は父上に会った事が無いし、普通の人間は相手が凄い人間じゃないかぎり父上を知っているだなんて思わないし……」

「分かん。お前はその『凄い人間』だろう」

「俺が金五家ならそうだって。でも俺は普通の人間として行くから、そう思わない」

「……人間は面倒だ」

それ以上、何かを考えるのを止めたらしい。

その少し悩んだような、憂いたような表情ですら麗しいとは最早異常。

異常な美。

異常美とでも言うべきか。

いいや敢えて異常美「ストレンジ・ビューティ」と言うか。

なんでもいいだろう。

とにかくこの美。

少年が今から行く場所にコレを越えるようなものは、一切無い。無いはずだ。

ちなみに目の前のこの男に並ぶ美貌の持ち主は、今までに五人しか

見た事が無い。
いずれも麗しい存在だ。
性格は別として。

「……とにかくだ」
ポンと長くしなやかな指を少年の肩にかける。

「お前はこの【俺】の育てた息子。 お前の名誉は【俺】のもの、
【俺】の名誉はお前のもの。 故にお前の名誉を貶る輩が居ようものなら【俺】の名を出しても構わぬ、何なら呼ぶが良いぞ、お前には許そう」

言葉は何処までも傲慢。

しかしそんな口調には確かに優しさはあり、愛情もあつた。
こんな言い回ししかないような人物なのだから仕方ない……のか
もしれない。

「うん。 ありがとう、父さん。 俺、父さんに育てられて良かったよ」

少年は確かにその愛情を受け取っていた。
嬉しそうにはみかみながら言う。

「何を当然の事を。 お前の親はこの《俺》だ。 金冠の魔神たる
この《俺》の」
口調とは裏腹に少し照れたらしい。
腕を組み、少年に背を向ける。

「ちゃんと連絡するよ」
「当然だ。 でなければ、そちらに行くからな」
少年に背を向けたまま。
でもやはり少し嬉しそうに。

少女は笑む

少しの沈黙。

居心地の悪さでも感じたか男はやや人間くさく、わざとらしい咳払いをする。

「ところで」

言葉の勢いはやや強い。

まるで話題を変えようとしているかのように。

「アレが、今にも飛び出しそうになっているぞ」

少年や女の居ない方向を見る。

そちらには何も無く、ただ白い壁があるだけ。

それだけのはずだった。

「構わぬ、来い」

そんな命令するかのような口振りに呼応するかのように空間が揺れた。

まるで水面に石を投げ入れたかのよう。

ありとあらゆる常識を無視して空間は揺れる。

その空間からするりと、浮かび上がるように少女が現れた。

背中まである真っ直ぐな金の髪を一部だけ短く二つに、黒いリボン

で結んで睫毛も眉も金。

肌はとても白く、頬と唇は薄紅。

こちらはこちらで、非常に可愛らしい少女だった。

纏うのは黒い衿に赤いタイ、プリーツスカートはギリギリ膝が見える長さ。

それは少年の服によく似ている。

ゆっくりと目を開く。

目の色は臙脂。

まず男を見て、深く優雅に一礼。

「魔神様、本日もお目にかかれて光栄でございます」

「ああ」

わりとどうでもいい、そんな口調。

「貴方の目と耳をお汚しする事を、この私にお許しくださいますか？」

「好きにしる」

ほとんど少女を見ない。

だが少女はうれしそうに微笑む。

視線を少年へ。

より一層うれしそうに微笑み、

「レイヴン様あ！」

勢いよく駆け寄り、抱き着いた。

少年の首に腕を回しぎゅっと抱きしめる。

見た目より軽い少女は、少年を誤って押し倒す事は無い。

「ああっ、この感触……このぬくもり、匂い、肌触り、全てが懐かしくございますわ！」

少年の胸に顔を擦り寄せる。

うれしそうに頬を赤らめてさえ居た。

「私……^{わたくし} ザイーシャは、レイヴン様にお会いする時を今か今かと、眠りも浅くお待ちし——」

「昨日も会ったよね」

「私には季節が一巡りするよりもずっと長く感じましたわ！」

少女は——ザイーシャは頬を擦り寄せるのをやめない。

まるでそれが至福だと言わんばかりに。

「今はレイヴン様の全てをこの網膜と肌と鼓膜に焼き付けていたいです……あぁっレイヴン様ぁ」

うつとり。

ザイーシャは止まらない。

「今日から、レイヴン様の今まで見た事の無い一面が見られるのですね……。走るレイヴン様、汗を流すレイヴン様、勉学するレイヴン様、他の方とお話するレイヴン様、食事するレイヴン様……あ……なんて素敵なのでしょう……」

「それ全部今まで見た事あるよね？」

「うふふ、『学校』は初めてですわよ。シチュエーションは初めてです。ならば私は、レイヴン様の全てを記憶しますわ……魔神様にも認められた婚約者として！」

『婚約者』。

その単語に少年——レイヴンは反応した。

正確には『魔神様にも認められた』。

「ちよつ、と、父上!？」

「なんだ」

そこでザイーシャはようやくレイヴンから離れた。
レイヴンが喋りやすいようにか。
むしろ魔神の視界を妨げないように、か。

ザイーシャよりも魔神は遥かに上の存在で、ザイーシャは尊敬以上の熱を持っている。

存在を感じるだけで嬉しそうにする。

魔神から話し掛けられた時などとても凄い。

これはザイーシャに限らず、ザイーシャの親戚全員そうなのだが。
もはや本能だ。

だからレイヴンに向ける愛情と魔神への敬意は全く違う。
天秤にかけると本能により後者の方が優先されるのだ。

「認めたってどういう事だよ！」

レイヴンの記憶では。

今までこの（養）父である魔神はザイーシャが婚約者である事を認めていなかった……気がする。

だからこそ色々と一線を守れたのに。

「……今まで【俺】が認めなかった理由は分かるか？」

しかしレイヴンの望んだ事とは違う事を男は言った。

ちらりと流し目でレイヴンを見る。

「え？ それは……別に俺がザイーシャの事を、」

「違う。……親としては、息子の将来を心配するものだろう？」

「……？」

言っている意味が分からない。

「今まで認めなかったのは、これがお前の将来を導ける器ではなか

「ったからだ」

「……器？」

「失念していたのだ。 ああ、この【俺】がな……珍しい事だ。
お前の婚約者に相応しいのは、どんな時でもお前を導ける者。 た
とえ夜の褥でもな」

……褥。

つまりベッドで……夜という事は……。

「……えっと、それはザイーシャが吸血鬼だから夜は元気とかの間
違いじゃ……」

吸血鬼だから夜は超元気とか。
アレ的な意味じゃなく元気で、アレ的な意味じゃなく寝られなくな
るからとか。

「この【俺】が失念していたのだ。 夜の経験は、紅辺りが何かし
ているのではないかと思ったが……そんな事は無かったようだな。
そんな折にこれはやり方を会得したのだ。 人間の夫婦とは、ま
ずこちらが大事なのだろう？」

「……………」

レイヴンは無言でザイーシャを見る。
ザイーシャは。

「私……レイヴン様に悦んでいただけるよう、精一杯努力します」
などと言って頬を赤らめた。

その意味する事は。

「ち、父上！ 俺の意見は！？」

一番大切なのは双方の意見……のはず。

「お前はこれが嫌いか？」

「好きだけど……いや、コレは父上が思っているような種類じゃない！ 普通にだよ普通に！」

「普通とはなんだ？ 普通の愛があるのか？」

純粹に不思議そうだった。

父に常識は通じない。

「……とにかく！ 俺は別に……ザイーシャの事を愛してたりするわけじゃないんだってば！」

言ってから、心配になった。

レイヴンはどうあれザイーシャはレイヴンを愛している……おそろく。

いつそ病的なくらいにだが、幼い頃から言っている事をあっさりと否定しても良いのだろうか。

「レイヴン様が、私を心配なさって……！」

何故か感極まっている。

目を潤ませてレイヴンを見つめていた。

「……構いませんわ。私は吸血鬼、レイヴン様は人間。人間の寿命は短く、故に様々な事に目は向くのは自然の事。なので、レイヴン様が私を見て下さるまで待ちますわ、何百年でも。たとえばレイヴン様が人間の女を好きになったとしても、私はレイヴン様を愛しますもの、ええそうですとも」

えらく自信があるようだった。

この様子では本気だろう。

とにかくショックを受けていないようでレイヴンは安心した。

「……で、父上」

「——申し訳ありませんが」
気を取り直して男を見る。

が、今までずっと黙っていた女が口を開いた。

「お二方、そろそろお時間でございます」

女の手には時を知らせるもの。

それが示す時間は確かに時間ギリギリ。
今すぐ此処を出なければ、少し危うい。

「続きはまた今度言う」

「うむ、【俺】の時間は無限だからな。 許そう」
鷹揚に頷く。

「行こう、ザイーシャ」

「はい、レイヴン様。 地の底までもお付き合いしますわ!」

「……まだ行かないから!」

沈黙は、行く可能性があったから。

二人は走り出す。

男が現れた扉に向かい、ふとレイヴンは振り向く。

男は黙ってレイヴンを見ていた。

それに向かってレイヴンは笑いかける。

「——行ってきます、父さん」

「ああ」

霧の小路に人は立つ

この白い屋敷を囲むのは『開かずの森』。

常に霧が立ち込め静かなこの森は、樹齢百となるような木が生い茂り中には千年もの時を刻んだ木もある。

そこに朝日が照らす様子は幻想的な光景で、つい筆を取りたくなるほどののだが、人の気配はほとんど無い。

何故ならそこは『開かずの森』。

普段はあるはずなのに誰も気付かず、間違って入れば方向感覚を失いなかなか外に出られない。

稀に方向感覚はしっかりしていたとしても森に住まう飢えた魔物や獣に襲われてしまう。

だからこそ『開かずの森』だ。

近隣の住民も滅多に近寄らない。

だが、実際はそんな事は無い。

方向感覚が狂うという事は無い。

ただ『戻りたくなる』だけだ。

そこに入った途端、ふと何かの用事や思い込みが入り、足を進ませる事無く終わる。

それは中にあるものを隠すための術。

だがどんな魔法使いも、誰もそれに気付かない。

その術者は、たとえ一流の魔法使いよりも遥かに上の存在なのだから。

さて。

そんな開かずの森が守るのはあの白い屋敷。

夢か何かと思うほど、汚れの無い無垢なる白。

全てが眩しいくらいの白に塗れたそれは、しかし優雅な佇まいだった。

そこに何があるのか。

基本的には誰も知らない。

そもそも屋敷の存在を知っている者は少なく、中でも人間は一人のみ。

その人間はレイヴンと名乗る少年だった。

レイヴンは人間だ。

間違いなく。

だが開かずの森に捨てられていた。

まともな人間は近寄れない場所なのだから、魔法で運ばれたのだらう。

この森には飢えたモノが多い。

赤ん坊が――ましてや無力な人間が――そこに居ようものなら、すぐに食われて死ぬはずだった。

ただ運が良いのか悪いのか。

レイヴンは拾われてしまった。

それも相手は人間ではなく、この世のありとあらゆる生物の頂点に居るような存在、魔神に。

魔神より上の存在が居るとすればそれは神話にのみに存在する神か。人間が魔法と呼ぶそれらは全て世界に七つある魔神により所有され、配下の精霊達がその魔法の力を貸し与えられている。

そこから更に人間が、『契約』もしくは『借用』で行使。

つまりほとんどの人間が魔法を扱う際は魔神との間に精霊を挟み、精霊を挟む以上は力が低下するのは当たり前。

人間の中には直接魔神から魔法を借りる者も居るが、そんなものは稀でどれも同じ血を引く。

そういった人間達を、それぞれの魔神の色彩に例えて、たとえば金冠の魔神なら金五家、黒天の魔神なら黒三家と呼ぶ。

しかし彼らも全員が全員魔神の顔を把握していないし、ましてや魔神全員を知っているというのは有り得ない。

今までの歴史を紐解いてみれば、そんな人間は片手で足りるほど。

レイヴンは、それくらいに希少価値がある人間の一人だった、一応。

「私はいつも、非常に悩んでいるのです……」

ザイーシャは悩ましげに呟く。

何処までも白い廊下。

革靴で歩くとコツコツと響く。

ついでにゴロゴロと車輪の音。

生活感は無く、誰とも擦れ違う事が無い屋敷。

「私は時と空間を統べる金冠の魔神様に仕えるラ・ルルーシュ家。

……レイヴン様一人を運ぶくらいは容易なのです。世界の裏側にだって可能なのです」

「知ってるよ」

「出来る事なら私が！ 運びたかったのですが……」

目の前にある扉を見て、悲しげに。

「……魔神様がお作りになられたものを無視する事は……ああ……」

……」

とっても悩ましげ。

レイヴンはちらりとザイーシャを見て、慰めるように話し掛ける。

「向こうに着いた後は、帰る時もザイーシャの力を借りるから。頼りにしてるよ」

「まあ！」

ぱあっと花が咲いたような笑顔。

「そんな、頼りにしているだなんて……うふふ照れますわ、興奮しますわぁ……」

「……。うん、じゃあ行こうか」

純白の扉を開ける。

見た目に反し重さは全く感じさせない。

部屋の中は広いが、調度品は無い。

ただ床に、金色に光る陣が敷かれていた。

魔神によって設置された、半永久発動の移動陣。

望めば何処へでも行ける。

しかし二人が立って入れる分の大きさしかない。

「……こんな大きな荷物で、大丈夫か？」

手にした荷物を見る。

レイヴンにしるザイーシャにしる、家出を越えた量の荷物を持っている。

ザイーシャなどよくも一人で持てたと感心するほどの量だ。

「やっぱり向こうで買い揃えた方が……」

「まあ。私、いくらなんでもレイヴン様関係

「行こう」

「はい」

二人並んで陣へ。

二人が足を踏み入れた瞬間、陣は一際大きく輝いた。

視界は全て金色の光に染まる。

まるで宙に浮いているかのような感覚。

あまり慣れたものじゃない。

だが流石は魔法の大元の魔神。他に比べれば遥かに安定している。

目を閉じる。

瞼の裏にも金色の光。

だがやがて、色彩が変化した。

無風だったはずが、頬に風が当たる。

まるで狭い道を吹き抜けるかのような風。

自分の呼吸と胸の音しか聞こえなかったはずなのに、人の喧騒が聞こえる。

とても賑やかな声。そして行き交う足音。

目を開けると、そこは街の路地だった。

大きな道から分かれた、建物と建物の間に出来た小さな道。

二人はそこに立っていた。

寮は影濃く

そこは大陸でも大きな権力を誇るサンクテュオン王国で、上位を争うほどに発展した街だった。

開かずの森より南に位置し、四方を山が囲み自然が城壁を作ったような街。

この街は普通の街ではない。

何故なら、サンクテュオンにある『全ての国民はより優れた教育を受けるべきである』という法により求められ、そして作られた街だからだ。

街のあちらこちらに教育の場、つまり学園がある。

そしてその生徒や教師の住む寮や一軒家や集合住宅、他にも商業施設まで。

中央にはこの街、ラディ・ルーアの領主ザンバ・ルーアの屋敷であり誰もが気軽に訪れる事が可能な役所。それを囲むように学園などがある。

さて、学園や関連施設などばかりとはいえ一般人も観光客も居る。人が集まる所には当然のように人が集まるからだ。

それは街に活気を呼ぶ。

故に、街は賑やかなのだが。

「その兄ちゃん！　ウチの店においでよ、良い武器揃ってるぞあ？」

「あら、武器はウチが一番よ！　新入生には優しく手ほどきだつてするわ！」

「魔法を綴じた本は要りませんか？　今なら新学期祝い、特別にサ

ービスするわ！」

「皆さん！ 自由に空を飛んでみたくないませんか！？ こちらは飛翔の契約付き箒が安いですよ！」

「アイヴスの葉！ 緑輪樹の幹！ ファイドラゴンの眼！ 良いのが揃ってるよ！」

新学期だからか。

それとも入学の時期だからか。

ある程度重い荷物を持った学生服の少年少女は、大通り沿いの店の者に手招きされていた。

「……すごい活気ですね」

「……だな。 前に来た時はもうちょっと、落ち着いていたけど」
やや驚いた様子のザイーシャにレイヴスは返す。

彼らもそんな、店の者に手招きされる多くの学生の一部だった。
しかも他とは多少扱いが違う。

「やや、その制服は！ ライハバック学園のもの！ という事は未来のエリートですか素晴らしい、どうですか未来のエリートに相應しい衣服を！」

「これは空間に干渉する魔法の契約が使われた水晶。 望む場所を移しますよ？ 回数はなんと三十！」

「ライハバックの生徒はそれ相應のものを持つべきなのです！ どうでしょう、この箒！ 最高級のコツコ鋼を芯に抜群の安定性を保証するユーアの枝を使い、乗り心地も最高です！」

「このリボンをよくご覧ください。 美しい銀でしょう？ なんとザイーシャの樹の朝露で清めたものなのです」

二人の制服を見た瞬間、誰もが目の色を変えて押し寄せる。
そして誰もがやや高いものを売り付けようとする。

「これの効果凄いなあ」

自分の制服についた紋を差してレイヴンは苦笑い。

そんなレイヴンのすぐそばに寄り添ったザイーシャは誇らしげに胸を反らし笑う。

「レイヴン様の素晴らしさには、誰もが惹かれるのですわ」

「それは違うけど……」

「自分を卑下なさらないで、もっと誇りに思ってくださいな」

ザイーシャは、人が集まる理由がレイヴンが優れた人間だからだと思っっているようだった。

自分の制服が、この街でもトップクラスの学園のものだからとは一切思わない。

「しかし、いくらレイヴン様という光に惹かれたからと、虫がたかるのも困りもの……」

小さく呟くと、ザイーシャは後ろに振り向く。

スカートを軽やかにひるがえし、優雅に微笑む。

「申し訳ありませんが、忙しいのです。後にして下さいな」

細められた赤い目。

柔らかな美少女の微笑み。

それを見た誰もがぼうつとする。

そしてふらふらと道を引き返し、元の場所に戻った。

「……あんまり、魅了眼は使わない方が良いよ」

吸血鬼は、人間にあまり良い印象が無い。

魅了眼を持つのは吸血鬼やごく一部の人間くらいだ。

「大丈夫です。　そうそう、気付く輩は居ないので」
ザイーシャは勝ち誇った笑み。

別に、はつきりと力は見えたり感じる事はない。
だが人間の中にはそういった気配に敏感な者は居る。
それが何処に居るか分からないからこそ、注意が必要なのだ。

「ところでライハバック学園は、この道で良いのですか？」

「ん？　ああ、この道で合ってると思うんだけど」
大通りを反れて坂を登る。

周囲の道は良く整うようになり、周りは建物が綺麗なもののばかり。
同じく坂を登る生徒は、レイヴンやザイーシャのものと同じ制服。
彼らがちらちらとこちらを――ザイーシャを見るのはやはり、周囲
から突出して可愛いからだろう。

「……私のライバルが多くて困りますわ、まさか同性まで魅了されるなんて、レイヴン様ったら……」

「俺じゃないから」

皆が見ているのはザイーシャが可愛いからだ。
ザイーシャは分かっていない。

すらりとした手足に雪のように白くきめ細やかな肌、睫毛は長く金色、唇は薄い色。　髪は真っ直ぐで金色。

誰もが視線を奪われるくらいに愛らしい少女だ。

確かに吸血鬼が全体的に見目麗しく、それを上回る存在の魔神が居るからそれほど自覚が無くても仕方ないが……。

それでも今までで何十人も人間が振り向いているのをレイヴンは知っている。

自覚が無いにしては少し不思議だ。

「まず寮でしたね」

「荷物を預けなきゃ」

「……レイヴン様と離れるなんて、辛いですわ
わざとらしい溜め息。」

二人で歩いて登った先に、高い塀に囲まれた黄混じりな色をした建物
物が二つ。

建物を繋ぐ廊下と小さな建物があり、そこに荷物を持った人物達が
消える。

その人物達の中には生徒とは到底思えない背格好も居たが、塀の近
くに高級そうな車も停まっているから生徒の関係者だろう。

二人で小さな建物に入る。

受付らしき場所は生徒などで大きくこった返していたが、機能はし
ているらしい。

列を成していたのでそれに並ぶ。

「同じ部屋だと……良いのですが」

「無理だからね？」

男と女は、当たり前だが部屋が違う。

外観を見るに、片方が女子寮で片方が男子寮だろう。

まさかザイーシャも、部屋に入り込むなど無いだろうが……。

列の減少は早い。

レイヴンの番が来たのはすぐだった。

「おはようございます、貴方のお名前は？ 生徒証の提出をお願いします」

三十ほどの小綺麗に化粧をした女性が問い掛ける。

「レイヴン・ゴードイオ。新入生です」

制服と共に届いた生徒証を出す。

それを見てレイヴンを見て、しっかりと頷く。

「レイヴン・ゴードイオ様ですね。了解しました、荷物をお預かりします」

レイヴンは手に持った荷物を差し出す。

結構重いが女性は軽々と持った。

荷物の全てに何かが書かれたシールのようなものを貼ると、荷物を床に置く。

「お部屋は男子寮の208号室になります、こちらはお部屋の鍵です」

差し出したのは六角形の木に208と掘った飾りと銀の鍵。

「お荷物は全て、お戻りになられるまでにお部屋に送ります」

「部屋は全部、相部屋なんですよね？」

「はい。同室者をお知りになれますか？」

レイヴンは少し迷ったが、頷く。

同室者は、一年間本当に同室だ。

いろいろと見られる事もあるだろう。

「レオニール・エレヴァン様でございます」

「……………」

金五家の人間だ。

つまり金冠の魔神の……。

確か、序列第一位。

昔は三位と低かったが、最近になって一位となった。当主候補が相当、優秀らしい。

会った事は無いからレイヴンは詳しくは知らないが。

覗き見るのは看板で

ライハバック学園に中等部は存在しない。

この学園の方針が『生徒に貴賤は無く、平等な教育を』で、よく分らないが中等部は無いらしい。

身分の貴賤は無く、一定の人格や能力が推薦さえあれば入学が許される。

しかし他の身分のみを優先した学園より結果が優れているのは事実だった。

此処の卒業生は皆、立派な道を歩んでいるそうだ。

「中を見たのは……初めてだなあ」

敷地は非常に広い。

屋敷よりも広いのだから相当だ。

白い壁に青い屋根がよく似合う。屋上は無いらしい。

周りでは同じ新生入生が初々しい顔をして門を潜り、在校生が仲の良い友達と並んで潜っている。

ちなみに正門は、『正』門なのに二つある。

外側の門で様々な車が停まっては生徒が現れ、使用人に見送られる。

二人はそんな外側の門を通り、内側の門の所まで来ていた。

生徒達の群れは、校舎の出入口に向かっていた。

正確にはその近くにある白い看板にだ。

「クラス分けですわ。レイヴン様の名前は……」

遠くからそれを眺めるザイーシャ。

吸血鬼の目は人間とは違う。

暗い方がよく見えるそうだが、明るくても人間の数倍だ。

「…… Bですわ！ 私もB、同じですわ、同じですわね！」

「そっか」

喜ぶザイーシャの隣でレイヴンは頷く。

まさか妙な権力は働いていないだろう。

「ザイーシャ」

「はい！」

「レオニール・エレヴァンって、同じクラスか？」

「…… エレヴァン、ですか？」

やはりその名前に聞き覚えのあるザイーシャは聞き返す。

「金五家序列一位で……」

「関係者っぽいな。 まあ分からないと思うけど」

「悔しいですわ、早速私よりもレイヴン様が気にされるような者が居るだなんて……」

金冠の魔神に仕える者は、自分達より上であるかのような顔をする金五家にあまり好意的ではない。

勿論、個人の些細な感情など、いざ魔神が『やれ』と言えばあつという間に吹っ飛んでしまうが。

しかしザイーシャにはそれは当て嵌まらなかったようだ。

「レオニール、でしたわね……… 同じクラスですわ」
少し残念そうだった。

「金五家であるだけではなく、レイヴン様と同じ空間……… 同じ吐息、同じ風、同じ寝息を感じられる空間に居るだなんて……… 羨ましいで

すわ」

「同性なんだから気にする事は無いと思うんだけど」

「これからは会いたい時にレイヴン様に会えなくなるという悲しみは大きなものなのです。……いいえ、私堪えますわ。耐え忍び

ますわ。いつかレイヴン様が私だけを見てくださると信じていますもの……」

自らの胸の前で手を組み、うれしそうに空を見る。

いつからザイーシャはこうだっただろう、と考えてみれば会った頃からこうだった。

「レイヴン様？ 入学式は講堂ですって」

ただしザイーシャはえらく切り替えが早かった。

「行きましようよ」

「うん……行こう」

二人並んで進む。

多くの生徒が一喜一憂する看板の前を過ぎて、講堂に向かう。

「学園生活とは、どういうものなのでしょう……気になりますわ」

「俺も知らないからなあ」

学園……というよりは、集団生活が初めてだ。

ザイーシャはまだ自身の家族や親族が居るからある程度の経験はある。

しかしレイヴンの場合、家族といえは金冠の魔神くらいで、自動人形——何も知らない人間には自分と同じ人間に見えただろう、それくらい傍目には感情豊かだ——はあくまでも使用人。

確かに自動人形達は話し相手になるし、ザイーシャ以外にもまともに生きてる者——ただし人間ではない——と喋った事もある。

色々と用事があって屋敷の外で人間と喋った事はあるが『おはよう』

や『今日の天気は良いですね』くらいだ。

「そもそも、此処に来る事になった経緯自体アレだし……」

知り合いが『学園の一つや二つも行っていないだなんて……アナタの母上が知ったらどう思うか』だなんて言って、そのちょうど良いタイミングでこの学園の推薦が来て。

……どうして推薦が来たのかは謎だ。

何故ならレイヴンの住む屋敷は開かずの森にあり、開かずの森に人間が住んでいるなんて知っている人間は居ない。そもそも何故、よりによって名門ライハバック学園だったのか。

どう考えても知っている誰かの仕業だ。

それが誰かは、まだよく分からない。

いや……実は大体分かっている。

というか一人しか居ない。

相手を一人と数えて良いのかは分からないが。

「学園というものを知っているのは……私の周りには居ませんわ、力になれなくて申し訳ありません」

「そっちはそっちで教育受けるから仕方ないだろ」

レイヴンに推薦が来た。

それを知ったザイーシャは、急遽ライハバック学園の入学試験を受けたのだ。

経歴不明、正体不明のまま。

勿論面接もあるが、しかしその辺りも含めて魅了眼でどうにかしたらしい。

強引すぎる。

しかし本人は『けれども試験は全て私の実力ですわ』と胸を張っていたから、都合の悪いところだけ魅了眼を使っただけようだ。

「……そもそも、なんで推薦が来たんだ？」

ぽつりと呟く。

「それは勿論レイヴン様が優れた……」

「だとしても、人間がそれを知っているなんて思えないんだ」

ライハバック学園は実力第一。

つまり実力さえあればどんな賤しい生まれでも受け入れるし、実力が無いなら王族すら跳ね退ける。

入学するには試験か推薦。

推薦にしたって、まず推薦する者は社会的信用があるのが前提。

推薦状が学園に届いた時は当たり前のように対象の監察があり、それで許可された場合に入学可能。

レイヴンが誰によって推薦され、いつ監察が入ったのか。

レイヴンの予想が当たっていれば、やはりやらかしていそうな人物に心当たりがある。

レイヴンは内心溜息を吐く。

一体、何を考えているのやら。 分かった試しは無い。

講堂の中は既に人が集まっていた。

広所恐怖症なら卒倒しそうなアーチ状の天井は、ところどころにステンドグラスを嵌め込んでいる。

ステンドグラスが描いているのは、どうやら勇者の物語らしい。

大昔に魔神を—— 白虹の魔神を倒した勇者。

七つあるはずの魔神が、今は六しかないのはそれが理由だ。

白虹の魔神。

黒天の魔神。

紅蓮の魔神。

碧緑の魔神。

璃蒼の魔神。

紫暗の魔神。

そして金冠の魔神。

白虹が倒されたから、今は六。

話では白虹は沢山の悪事を成したらしい。

だから勇者が倒した、と。

勇者が本当はどうして白虹の魔神を倒したのか、一応は当事者であるはずの金冠の魔神に尋ねはしてみたが『知る必要は無い』と即却下された。

座席が何百も並んで、半分が生徒で埋まっていた。

残りは来賓と教師。

二階席があつたが、これは保護者らしい。

座席には紙が貼られ、紐で枠が作られている。

ある紙には3、C。ある紙には3、A。

どうやらクラス分けらしい。

新入生の、レイヴン達の席は舞台の正面。

座席に名前までは印されていないから、来た順番に座れば良いのだろう。

在校生の席は賑やかだが対称的に新入生の席は静かだ。

レイヴンは1、Bの席へ行き、ザイーシャをまず通しその後が続く。講堂に入ってしばらくしてから、今に至るまで二人はずっと視線に

晒されていた。

正確にはザイーシャは、だが。

類い稀なる美も目立つから考え物だ。

時々ちらちらとレイヴンも見られているが……それはザイーシャと一緒に居るからか。

自分の容姿に目立つ要素は無い、とレイヴンは考えていた。

確かに右目には黒い眼帯はしているが、それ以外は普通のはずだ。

髪は金で目は……黒。

中肉中背。 やや北の産まれに見られるかもしれないが、それまでだ。

席に座ってしばらくすると、レイヴンの隣に生徒が座った。

男子生徒だ。

新緑の目が印象的な、よく焼けた肌に黒い髪。

南の産まれだろうか。

少なくとも金五家ではない事は確かだ。

金五家は——他のにも言えるが——魔神と同じ特徴を求める。

金五家は金冠の魔神。

つまり、金髪に金眼。

両方の特徴を持つ場合はなかなか無いらしいが、少なくとも片方は持つ。

隣の彼が、金五家であるようには到底思えなかった。

見ていると、やはり気付く。

男子生徒はちらりとレイヴンを見た。

「……何か、俺の顔についてるか？」

小さな声で話し掛けてくる。

「……いや、なんでもないんだ」

同じく小声。

二人の会話はそれだけで終了した。

ゆらめくは熱持っ影

ほぼ全ての席が埋まっつての入学式が始まり、少しの時間が過ぎた。校長と来賓の挨拶は既に終わっている。

誰かが喋り、終わる度に惜しみ無く拍手がばらまかれた。

立つては座り立つては座りを繰り返しているものだから、寝るに寝られない。

「続き現生徒会会長、アリス・エレヴァンの挨拶です。生徒会会長、お願いします」

一瞬会場がざわついた。

エレヴァン。

金五家、現在序列一位の。

レイヴンと同室のレオニール・エレヴァンと同じ姓だが親戚だろうか。

校長や来賓代表が座っている席から、一人の少女が歩き、壇上に上がる。

青いカチューシャと撫でたような肩までで揃えた金髪は柔らかく波打ち、その双眸も同じ色。

全身がすらりとはしているが、胸が平均より少々大きいのは気になる。

黒地に金の文字。

金五家の証拠だ。

その雰囲気は非常に穏やかで、まるで心が落ち着かせるかのよう。そして、何故かレイヴンのよく知る人物——金冠の魔神に似ていた。顔立ちも雰囲気もまるで違う。なのに、よく似ていた。

少女は壇上に立ち、校長や来賓代表と同じく拡声の魔法が付けられたマイクに向かって話す。

「新入生の皆さま、その保護者の皆さま、在校生の皆さま、先生方、来賓の皆さま、おはようございます」

爽やかな声色だ。

喋ると益々、魔神と掛け離れている。

しかし、金髪金眼とは。

流石は序列一位のエレヴァンと言うべきか。

元々は三位だったエレヴァンが何故、序列一位になったのか、それは今の当主候補が優秀だかららしい。

なんでも金髪金眼の男だそうだ。

今壇上に居るのは、金髪金眼だが少女。つまり女。

……魔神というわけでもあるまいし、まさか男であるはずがない。

「——私は、二十九代生徒会会長として皆さまの入学を心からお祝いし——」

ふと隣を見れば、男子が居眠りをしていた。

腕を組んで船漕ぎをしている。

起こそうかと迷ったが、放置をする。

しばらくすると、少女が一礼し壇上を去った。
物凄い量の拍手が送られる。

もしかしたら、校長以上かもしれない。
それほど話の量も無かったからだろうか。

隣の男子はびくりと動き、はっとする。

「……………おおう」

本気で寝ていたらしい。

またレイヴンと視線が合う。

視線だけで挨拶。

「……………おはよう！」

向こうからの小声。

「……………おはよう」

レイヴンも小声。

聞こえたらしいザイーシャがちらりと視線を向けてくる。

「これ……………長くないか？」

校長の話と来賓の話がやたらと長かった。

勿論レイヴンは『学園』など話に聞いたものでしかないが、校長の

話が長いというのは聞いていた。

でもこれは長い。

会長が奇跡の短さだったのはなんとなく分かる。

「……………来賓と校長の話ってのは大体長いんだよ」

しみりとした顔で男子。

壇上では、新入生代表が挨拶をしている。
なんとも初々しい、黒髪の少女だ。

「暑い中であんな長い話を聞かされたりしたら……ぶっ倒れる奴は大量だからな」
覚えがあるかのように男子はぶるりと震えた。

「……そっちは短かったのか？」
「……………」
実は行った事が無い、とは言えない。

「……短かったよ」
頭の中で勝手に存在しない学園を設定し呟く。

「……俺ら、同じクラスだよな？」
「？ ああ……そうだけど」
同じ列に座っている以上そのはずだ。

「俺、ジェールシーエッド・グリーンウェル。 ロッガレイ出身」
「ジェールシ……？」
言いにくい。

ロッガレイといえば此処より南の、流砂漠のある共和制の国だ。
随分と遠いところから来たらしい。

「ジェールシーエッド。 シエードが分かりやすいから、それで良いぞ、俺のこれラブリーネーム。 ……そっちは？」
レイヴンを——正確にはレイヴンの目をじっと見ながら。

「レイヴン。 レイヴン・ゴードイオ」

「……………」

その視線は『足りない』と言っている。

「この国の出身……だけど」

何が足りないのだろうかと出身を付け加えてみた。

「……なんか、違うっぽいな」

視線を反らし更に小さく。

まるで独り言のように。

「何か、足りなかったか？」

何かの反応を期待していたらしい。

まさか学生の挨拶にはまだ知らない挨拶があるのだろうか。

ローカルルールが、学生に適用されないわけがない。

「ん……いや。 今年は『魔王』が入るって、噂だったから」

「……魔王？」

なんか嫌なネーミングだ。

「それって、魔神みたいな……」

「違う違う。 魔王は人間だってさ。 金髪に黒目で、右目に眼帯、

北方系、男、年は十代」

確かに見た目は似ている。

が、そんな特徴の人間は探せば大量に居そうだ。

「金髪のめちゃくちゃ可愛い女の子連れてて」

……確かにザイーシャは可愛い。 それも『めちゃくちゃ』に。

「魔神を従えてるから、ほとんどの魔法が使えて超強いとか」

「……それ俺じゃない」

魔神を従える？

無理だ。不可能だ。

性格の時点で無理だ。

「でも、新人生で金髪眼帯は……」

「……………」

レイヴンしか居ないらしい。

「……この学園には居ないとか」

「理事長が自分で誘ったって……話」

「理事長？」

「……今、紹介されて壇に上ったぞ？」

見れば確かに壇上に人物が上っていた。

真っ黒なそれは、遠くからでもよく分かるほど白と黒の差がはっきりとしたスーツ。身長はレイヴンより上だろうか。

室内だというのに黒い帽子。

帽子からちらりと見えるのは、服と同じくらいに黒い髪。

やや鋭い印象を与える黒い目。

その動作も鍛えられた人間のもので、油断が見られない。

理事長、というものがよく分からないがとにかく校長と同じくらい偉いらしい。

そう思っていたが、その人物は意外にも若かった。

レイヴンより上だが……大体、二十歳半ばの男。

顔の造作は、美形と言っても不思議ではないものだ。

明らかに周囲から良い意味で浮いてしまうような。

異性なら確実に目をつけたいようなタイプの。

だがその雰囲気は、安易に近くに寄れはしないほど鋭い。

しかしレイヴンに相手の顔は全く衝撃を与えなかった。
いや、確かに衝撃は与えたが……。

拡声器前に立つと、男は、にへらと笑う。

先ほどまで鋭いナイフすら思わせていたのが台無しだ。

「えー……あーあーですてす……皆さん、こんにちはあああ……！
私、本学園理事長の、フレデリック・バロットエです！ まあ自由にお呼びくださいよ」
口調まで台無しだ。

隣のザイーシャを見るとレイヴンと同じ気持ちなのかぼかんとしている。

当たり前だ。

「はじめまして！ 新入生の皆さん。 お久しぶり！ 在校生の皆さん。 お元気ですか？ 来賓の皆さん。 私は本学園理事長のフレデリック・バロットエ……大事な事なので二回言いました！」

先ほどより雰囲気は胡散臭くなっている。

いや、あれは元からだ。

元々は胡散臭さが爆発しているような人物だ。
「そもそも本学園は、勇者の再来を祈願し、未来の英雄を育成するがために成立し、教師陣の尽力もあって上手く……ってコレは親父ギャグじゃないんですよ？」

「……なんであんなところに」
「ええ……」

理事長。

フレデリック・バロツトエ。

顔立ちは本来とはやや違うし、髪や目も本来とは違うが。
だが二人にはよく見覚えがあった。

「とにかく、勇者再来を祈願するこちらとしては、次世代の育成も
しつつこの中にかの勇者の剣を岩から抜ける人物が居る事を願って
います——」

あの表情。

あのおふざけっぷり。

どう見ても二人の非常によく知る人物だ。

「優秀な生徒の確保には様々な方面からの援助もありまして、将来
その『様々な方面』に巣立つ生徒も多く——」

その正体は人間ではない。

他のどれよりも神出鬼没で、おそらく人間界をよく知っている人物。

あの理事長は。

——紅蓮の魔神。

レイヴンが学園来るきっかけのような発言をした、その張本人であ
った。

遠い距離も短くなる

「……はめられたんだ」

理事長の——というか、その正体は魔神である——やたらと長かった——話がすぐに脱線するからだ——挨拶も終わり、よく知らない校歌や国歌も歌った。

それから、拍手に包まれなが教師らしい男に連れられ講堂を出る。現在、校舎の廊下を二列で移動中。

校舎の中は木造建築のように暖かみがあり、顔が映るほどに磨かれた床。

「……まさかあの方がいらっしゃるなんて」

「あの人なら、俺のとか出鱈目な噂流すなあ……」

世界に七ツしか無い魔神のうち一ツ。

紅蓮の魔神。

名前の見た目は豪華だが、実際はただの快樂主義。

につこり笑って人をバカにするタイプだ。

見た目に騙されてはいけない。

ついでに言うと、レイヴンが妙にお気に入りなのか小さい頃はよく拉致された。

そして色んなところを連れ回された挙げ句、変な事をさせようとする。

無理矢理、某男娼館主催の女装コンテストに出させられたのは十の時。

すっかりと——裏で卑怯な手——催眠暗示裏金などなど——を回して——優勝させられ、男娼館に入れられかけた。

ギリギリで（養）母である魔神が『何をやっておるか！』とキレて登場。

二神で周囲に被害を与えて終わった。

金冠の魔神はとりあえず怒っていたが紅蓮の魔神は明らかにからかっていた。

「全部分かってて、俺に『学園の一つや二つ』なんて言ったんだ。

だから都合よく推薦が……」

魔神なら、レイヴンの居場所を知っている。

金冠の魔神にバレないように忍び込むのも可能だろう。

全ては計画されていたのだ。

「……………でも、私は感謝していますわ」

ザイーシャは厳かに胸の前で手と手を合わせ、指を絡ませる。

「あの方のおかげで……………滅多に見られない制服姿のレイヴン様が見られたのですから」

「……………そりゃあ、ザイーシャは良いだろうけど」

レイヴン的にはあまりよろしくない。

相手の手の平で躍らされているかのようにだ。

「……………まあ、いいや。来た以上は……………うん」

自分一人で頷く。

相手は——紅蓮の魔神は決して油断出来る相手ではない。

だが今のところそれほど酷い事は無かった……いやあった。
だがどれも最終的にはなんとかなっている。

それよりも気にするべきは『魔王』だ。

まさかそう呼ばれているなんて思いもしなかった。

確かに……確かに、魔法の持ち主である魔神から精霊を経ずに魔法を借りている。

魔神と知り合いだから大抵の精霊が——特に金冠の魔神に忠実な精霊は——友好的だ。

魔法など傍目には使いたい放題だろう。

それにレイヴンは今までに何度も、紅蓮の含め他の魔神によって『暇つぶし』と称しては色んなところに叩きこまれている。

たとえば一触即発な戦場だったり。

たとえば子育てという危険な季節のドラゴンの巣だったり。

どう考えても危ない廃墟だったり。

色んな意味でアブなくてイケない場所だったり。

暇で暇で仕方ない、齡千を越えた魔神達による暇つぶし。

その分、他の者には出来ない事が出来るのだが。

とにかく魔王と呼ばれているなんて思わなかった。

まさか紅蓮の魔神が一方的にばらまいた噂でもないだろう……が、地味な嫌がらせもやりかねない。

「此処が、教室だ。 黒板に名前が書いてあるからそこに座るように」

教師らしい男——実際に教師だろうが——はとある扉を示す。

白い、でも少し汚れた感じのある引き戸の扉。

壁には『1—B』と書かれている。

がらりと開かれた部屋。

そこはレイヴンが思っていた以上に狭かった。

個性の無い机が幾つも並んでいる。

壁にある窓は大きく別の壁には緑がかった黒い板。

これがコクバンか。

白い線が縦五、横四に四角を作っている。

その一つ一つの内側に名前。

その中に『ゴードイオ』——つまりレイヴンの名前もある。

四角の数は机と一致していた。

これに合わせて座するという事だろうか。

少し立っていると周りの行動は素早かった。

それぞれに黒板と机を見比べて座る。

レイヴンの名前が書いてあった机には誰もまだ座っていないから…

…きっと、レイヴンの机だろう。

おとなしく座ったが、間違っではいなかったらしい。

『ゴードイオ』の名前の下に『ハルモニア』。

これはザイーシャだ。

勿論本名ではない。

レイヴンの後ろの席にザイーシャが座る。

ふと前の席を見ると先ほどまで喋っていた男子、グリーンウエルが座っている。

どういう基準の並びなのかなんとか分かった。

黒板を見る。

それはすぐに見付かった。『エレヴァン』。

分かりやすいスペルだ。

対応する席を見ると、それは斜め前の席。

金に近い茶髪が襟足に届くような長さの少年がそこに居た。

顔はよく見えないが、斜め後ろから見た様子では非常に穏やかそうだった。

身体の線も細く、喧嘩に弱そうだ。

席に座った何人がレイヴンを見ている。

残りがザイーシャを見ている。

……『魔王』。

噂はどこまで広がっているのだろう。

「はい、じゃあ皆さん？ ゆっくりする暇は、無いからな？」

黒板の前にある、他に比べ形も違えば高さも違う机の前に男は立つ。

ただし顔は見えない。

机の上に紙が大量に置かれているからだ。

決して、背が低いからではない。

知らせるは己

『此処に居るのは、ほぼ全員知らない顔だな。　ちゃんとして例外無く自己紹介だ、此処に居るのは今から一年間の付き合いになる仲間だ』

と言い男——担任、らしい——はまず自分を自己紹介した。
ジエームズ・ファンナ。　という名前らしい。

改めて担任である男を見る。

服装は清潔で見た目も清潔。　薄い色素の茶髪をオールバックにして額がよく分かる。　目は黒。
しかし少しダルそうだ。

見た目は清潔だが、その姿勢にやややる気が見られない。
服装と雰囲気の違いがあまりにも大きくて、違和感ばかりだ。

「——シャルロット・ダーエです」

背の高い、少女の声。

ふんわりとした赤毛を編み込み、何本も細い三つ編みにしている。
肌は白いが、やや白すぎる。

「特技は声楽で——」

その少女のすぐ後ろの席。

レオニール・エレヴァン。

少女の番はすぐに終わった。

後ろの席で、茶髪の少年が立つ。

「……僕はレオニール・エレヴァンです」
にこりと微笑む。

花が咲いたような……というのは少し違うが。
まるで日だまりのようだ。

「見た通り腕力はないので精霊弾による銃を使っています」
確かに見た目は弱そうだ。

立った姿を見れば長身だが、大して筋肉があるようには見えない。

「あまり強くも賢くもない僕ですが…… よろしくお願いします」
礼儀正しく頭を下げる。

「ちなみに、アリス・エレヴァンは僕の姉です」

『僕の姉』が、強調されていた気がする。
気のせいだろうか。

エレヴァンはそう言って座った。
それだけらしい。

それからしばらくして、レイヴンの出番が近くなる。
番は、レイヴンの前。

グリーウェルは勢いよく席を立つ。

「ジェールシーエッド・グリーウェル！ ロッガレイ出身！ でも
って、えー……」
腕を組んで。

「好きなものはバドイとヌーガ・マウとアッキンとドージャと……
なんでも好きだ！ 最近、1+1が出来るようになった！」

周囲が意外なものを見るような目だった。

レイヴン的にはかなり初歩的なものだが…… 実は難しい問題なのだ

ろうか。

「ちなみに1+1は11だ……!!」

グッ、と親指を立てる。

レイヴンは背中を見ているだけだがおそらく良い顔をしている。

「……………」

……2と教わっていたが、どうやら本当は11らしい。
しかしそくだとすると今までに聞いた事が全て間違いだとは思えない。

この教室で、学力がついていける気がしなかった。

レイヴンは内心頭を抱える。

「嫌いなものは無い！ が、しかし、林檎はあんまり好きじゃない！」

その後何か色々と長々と喋っていた気がする。

しばらくの間1+1の答について考えていると、周囲の視線を感じた。

「んー？」

担任がのんびりと声をあげる。

「……ゴードイオ？ おい、ゴードイオ？」

前を見るとグリーウェルは既に座っていた。

グリーウェルの次は、レイヴン。

つまりそういう事だ。

「あっ」

グリーウェルとは違う意味で勢いよく立ち上がる。
椅子がぱたんと倒れた。

周りからくすくすと笑う声がする。

何も言わずレイヴンは椅子を立て直す。

「……」

小さく黙りながら、周りを見る。

他以上にレイヴンに視線が集まっている。

「レイヴン・ゴードイオです。 えつと……」

何を言うべきなのか、詰まる。

他の皆は何と言っていただろうか。

「出身は、この国……ガーベルニア。 特技は……」

あるのか。

ないのか。

分らない。

確かあった気がするが無い。

「……精霊に、ちょっと好かれるところ？」

レイヴン自身には特に無い気がする。

ただ精霊にとつて魔神は憧れも憧れの雲の上の存在で、近くに居られるのなら是非居たい。 身体を失ってでも近くに居たい、という考えの精霊ばかりだ。

その魔神のすぐ近くに居られてかつ気に入られている——……のだらうか？——レイヴンに対しては良いように振る舞う。

レイヴンから魔神に進言してもらいたいからだ。

だから一応、精霊から好かれる。

特技だらう、多分。

「……………」
「……………」
「……………」

「……………」
皆の視線が何かを期待している。
が、答えるに答えられない。

「……………」 以上です
椅子に座る。

それと同時にザイーシャが立った。
ただし優雅に。

「はじめまして。私、わたくしザイーシャ・ノルン・ハルモニア。……………」
そして「……………」
ちよつと顔を赤らめる。

「将来、ザイーシャ・ノルン・ゴードイオと……………」 呼ばれる事になります
「……………」

ざわっ！

…………… と実際に騒いだかはともかく、周りが驚いていた。

「つまりレイヴン様は私の愛しいお方……………」
語尾にハートマーク。
幸せそうだ。

「ですが私、略奪愛上等なので……何があっても全然構いませんわ
！」
にっこり。

背筋が凍るかのような微笑であつた。

忍び寄る熱量

大体が緊張した顔で、自分の席に座っている。
配られたプリントを改めて眺めたり、かばんに仕舞ったりとしていた。

担任はもう居ない。
話はもう終わった。

「……ザイーシャ」

「はい」

レイヴンはザイーシャに振り向く。

振り向かれたザイーシャは、にこにこ微笑む。

「いくらなんでも、ああ言うのはちょっと……」

「まあ。何の事でしょう?」

純粋なにつれしそうに聞くものだから少し反応に困る。

まるで、レイヴンはザイーシャのものであるような自己紹介。

これが事実ならともかく、事実ではない。

「私がどんな存在なのか、よく分かるように述べたまでなのですが……」

そう言うてから、顔を少し赤らめる。

「そう、私はかの方とレイヴン様の所有物……身も心も、全て……だからレイヴン様が、私以外のものに愛をお向けになられたって構

わないのです。 何が起きてても私はレイヴン様を愛しておりますわ」

「……………」

いつもこうだ。

昔からいつも。

ザイーシャに悪気は無い。

言っている事は心の底から思っている事なのだろう。

だがこれでは、少し心配だ。 色々と。

将来的な意味で。

「……二人はアッシャーなのか？」

レイヴンの後ろから声。

振り向くとそこにグリーウエルが居た。

『興味津々』と顔に書いて。

「アッシャーラ？」

「恋人って意味だ」

「それは違う」

「違いますわ」

同時。

ザイーシャがそう答えるのは、ちょっと意外だった。

「私はレイヴン様の婚約者であって……恋人ではありませんもの」

「その違いは？」

「双方からの愛があるかないか、ですわ」

……。

レイヴンに妙な罪悪感が湧いた。

「でも私、いつかレイヴン様が見ているくださると信じていますわ」

「そうか、すごいな！」

グリーウェルは謎に納得した。

「その歳で将来を誓うとは……幸せになれよ！」
誤解している。

確実に誤解している！

グリーウェルの目は確かに『凄い』があつて、きらきらしている。
グツ、と親指を立てて喜びを表現していた。

「あのさ、一応婚約者だけど俺達は別に「ごきげんよう」——ぎゃあ！」

燃えるような赤毛の美女がそこに居た。

褐色の肌をした豊満な肢体。 銀縁の眼鏡。

服装はスカートのスーツに黒タイツと質素だが、どうしてもその雰
囲気は艶かしく隠せてはいない。

シャツから豊満なそのの形が確かに分かり、動くも持たざる者には
いつそ憎しみすら湧くような揺れを見せる。

「そしてこんにちは」

マイペースな顔をしてその女性は言う。

「……あー、こんにちは」

あまりにも突然現れ、当たり前のような顔で挨拶するものだから気が削がれる。

内心、心臓がバクバクしている。

「歓談の最中失礼します」
にっこりと笑顔。

「レイヴン・ゴードイオ。 理事長がお呼びなので、来ていただけませんか？」

「ぐ……理事長が？」
うつかり名前で——名前、というよりはただの呼び名だが——言いかけて、やめる。

魔神の存在は誰もが知っている。
それぞれの呼び名を知っている人間も居るだろう。
しかし実際に会った人間はとても少ない。

言ったところで信じてもらえないだろうが、たとえば金五家の人間でない限り『頭がおかしい』などと言われても仕方ない。

そうそう簡単に口にして良いものでもないし、何より此处では『理事長』だ。『紅蓮の魔神』ではなく。

何を考えているかはさっぱり分からないが、下手に不興は買いたくない。

性格や見た目はどうでも、相手は魔神。
勝てるとすれば同じ魔神くらいだ。

レイヴンとでは到底勝負にもならない。

「はい、理事長がお呼びです」
銀縁の眼鏡をくいと押し上げる。

「私に、ついてきてください」
その口調は『ついてきて当たり前』。
だが行かなくてもどうせ後で突然現れて嫌がらせをされるのだ。

行かずに不興を買うべきではない。

なんだかんだで魔法を貸してくれる相手なのだから。

「あなたもお願いします」

ザイーシャの方を向いて。

この時周りの、まだ残っている生徒が驚いたかのような関心の眼差しを向けているのに気が付いた。

あんな挨拶だ、目立たないほうがおかしい。

それにこの女性、ただ居るだけでも目立ちそうだ。

「分かった。理事長のところ、行……きます」

最後だけ敬語なのは咄嗟の判断だった。

やはり……そうするべきろう。

もう普段の生活ではないのだから。

変わり来る玄

この学園は広い。

覚えるのにも時間がかかりそうだ。

一階だけでも廊下は幾つもあり、別校舎やら中庭やら図書館やら食堂やら講堂やらに続く。

教室も多く、文字を見ている限りでは科学準備室が幾つもあった間違えそうだ。

レイヴンとザイーシャが、突然現れた女に連れて行かれた先は本校舎四階。

つまりレイヴン達一年生の教室がある東校舎からすれば南にあり、中庭の廊下を通った先の校舎の四階。

正門から見て正面の、一番立派な校舎だった。

四階への移動に便利な魔法陣など無く——当たり前だが——階段を使ったのだが、流石に四階までくると窓から見える景色は格別だ。

周りの屋敷は大体が、高くても三階建て。

つまり視界を遮るものもなく、良い景色。

夜にでも見ればもう少し綺麗だろうか。

四階にある部屋は、『理事長室』のみ。

三階から更に上に昇る階段に足を踏み入れた時、上級生からの視線を多く感じた。

あまり良いイメージは無いのだろう、多分。

理事長室の扉は他よりずっと重々しい雰囲気をしている。

生徒の教室とは全く違う、高級な木材を使った扉。

やや光沢もあって踏み入るのを躊躇う。

「こちらに理事長がいらつしゃいます」

女は頭を下げる。

そしてゆっくりと頭を上げると、コンコンと扉を叩いた。

「お連れしました」

「入れてください」

中から声。

……やはり聞き慣れた声だ。

女は扉を開く。

中は、扉の外とは雰囲気が全く違った。

毛の長い真っ赤な絨毯、赤い立派な旗やカップ、コインが赤みのある茶色の棚に飾られている。

置かれたソファは棚とよく似た色で、立派な机も同じく。

壁が白いだけに、妙にその赤が目立つ。

……いや、赤ではなく『紅』と言っべきか。

扉の真向かいがガラス張りだ。

高所恐怖症なら顔を真っ青にするような、壁一面のガラス張り。

太陽が正面にあるにも関わらず光は強くなく、熱くも無い。

過ごしやすいくらいの熱。

ガラス張りの窓から中庭を見下ろす背中。

入学式の時とほとんど見た目は変わらず、服装もそのまま。

真っ黒なスーツ、やっぱり室内なのに帽子。

黒い髪に黒い目。

後ろ姿ですら完璧に絵になってしまっその立ち姿。

「やあ、レイヴン・ゴードイオ君。　ザイーシャ・ノルン・ハルモニアさん。　はじめまして」
にこりと振り向いて。

「私がフレデリック・バロツトエ……本学園の理事長をしております。　言わなくても知っているでしょうね、何回も言いましたから」
大体、十回は言った気がする。
しかしこの口ぶり。
まるで初対面のようなだ。

「……あの、アナタは、」
「おっと、私はフレデリック・バロツトエ。　その他の誰でもありませんよ」
ニコニコと制する。

「ですが良いでしょう。　互いに腹を割って——実際に割ったら貴方達死にますけど——話そうではありませんか」
そう言つとパチンと指を鳴らした。
その瞬間、理事長の姿が深紅の炎に包まれる。
だがそれもほんの一瞬で、すぐに姿を現した。

服装に変化は無い。
だが髪と目の色。　それらは、部屋にある赤のどれよりも深い紅だった。
顔立ちも少し変化していて、先程までのよりも確実に麗しくなっていた。
麗しい、というよりは格好良い、の部類になるのだろうか。

存在そのものが力。
姿を微かに見ただけでもそれはよく分かる。

これにはどう足掻いても勝てない。
いいや、勝ってはならない。

そう思うような、圧倒的な存在の差。
何もかもが違いすぎる。

理事長は爛とした鋭い視線を二人に向ける。

先程とは全く違う——皮肉げな表情。

口元にも皮肉げで挑発的な笑みが浮かんでいる。

「……んじゃ、まあ……しっかりとお話でもすつか？ ガキ共」

雰囲気がまるで違う。

今までの態度は一体何だったのだろう。

猫を被っていたのではないか。

そう思うほどに違った。

「ほんつとイイ態度しているな、お前？ この俺様に向かって断りも無く口を開いて——ああ？ こりゃ、アレか？ 特攻ってヤツか？ フツーは命乞いの場面だな」

ニヤニヤと笑って上着のポケットに手をつ込む。

「じゃあ質問だ。俺様は誰だ？」

「……………」

「……………」

二人の沈黙。

「……………」

ついでに女の沈黙。

「正解は、紅蓮の魔神。 そうだよ、俺様は魔神サマなワケ。 分かるか？ 世界に七人しか居ない、魔神サマなんだよ。 ——魔法を使いたい？ なら俺様に頭を下げる！ 仕方ないから使わせてやつても良いぜ、ただし三回だけな——っていう、魔神サマなんだよ！ それをなに、同等みたいなクチを聞いてくれちゃってるワケ？」

「……………」

レイヴンは黙る。

「俺様の話のコシ折って話しかけるっていうその根性が生意気だつってんだよ。 分かるか？ ま、分からなくてもしゃーねーな、たかが二十年も生きてない人間だからな、しゃーねーな、許してやんよ」

理事長はニヤニヤと笑って机とセットになった椅子に座る。

「じゃあ質問そのに、そんなにも偉くて凄い俺様がなんで理事長をしているのか？」

「……………」

レイヴンは黙る。

「質問そのさん、っていうかなんで俺様が、お前を此処に入れさせたか？」

「……………」

レイヴンは黙る。

「質問そのよん、なんで俺様がお前をわざわざ呼んだか？」

「……………」

レイヴンは黙る。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

理事長とレイヴン、そしてザイーシャと女の沈黙。

その場に居るのも切なくなるかのような静けさ。

外から微かに声が聞こえる。

「…………だんまりかよ？ それともその小せエ脳じゃあ、一つずつ言
ってやらなきゃ分かんないか？」

「……………」

レイヴンは黙る。

二人の視線が交錯。

静かに沈黙。

空気がやや重い。

理事長はレイヴンを静かに見る。

黙って見る。

「……………」

「……………」

二人の長い沈黙。

そして。

「……………ちょっとくらい反応してくれたって良いじゃないですか！」
理事長が、今までの態度は何処へやらごろごろと椅子の上を小さく転がる。

「なんなんですか、なんなんですか、何なのですか！ さつきからずうううつと黙って！ そんなに私の質問に答えたくないっていうんですか！」

「別にそんな事……………」

「つまりアレですか？ 『お前のそういう突然キャラを変えるのはもう飽きた』って……………そううつ事ですか？ そういう事ですよね？

ははあ……………じゃあ次からはオネエ系でやれば良いんですね」

話が止まらない。
いつもこうだ。

「はっはっは、構いませんよ。次からは新しいキャラですから。オネエ系や男色系、どちらが良いですかね？ 一肌脱ぎますが」

「どっちも要らないと思います」

「つれないッ！ 君って本当つれないねえ！ 君は事の重大さをわかっていない、私と話している……………私と口を聞く事を許される……………これがどんなに凄まじい事か……………！」

「分かつてはいますけど」

「ならもう少し嬉しそうにしてくださいよ。これじゃあ私の価値がだだ下がりじゃあないですか……………ただのモブのような、いいやただのモブのくせにキャストは豪華……………そんな存在に成り果ててしまうではないですか……………ッ！！」

理事長——紅蓮の魔神は一人、椅子の上でうだうだ言う。

魔神……………。

見るだけで、見てもらえるだけで、覚えてもらえるだけで、話しか

けてもらえるだけで喜ぶ精霊はたくさん居る。
死ねと言われれば迷いなく死を選ぶくらいにだ。
それは紅蓮の魔神にも金冠の魔神にも居る。

レイヴンの扱いは嫉妬深い精霊が聞けば夜道に後ろから刺されかねないほどに、凄まじい。
凄まじく羨ましい。

だからといってそれを誇りに出来るかと言われれば、目の前の駄々っ子と悪戯っ子を掛け合わせたかのような紅蓮の魔神を見れば出来ないのだが。

勲しは迫りて

「……ごほん」

魔神は咳払う。

椅子の上に落ち着いて丁寧に座った。

「……えー、では本題へ。君、レイヴン君。まず何故私が、この学園の理事長をしているのかですが」

「暇潰しじゃないんですか？」

「……………」

椅子の上で、机に肘をついて手で顔を覆う。

深く嘆きの溜息。

どうやら凶星だったらしい。

「……まあいいでしょう。その次、何故君をこの学園に入れたのか」

レイヴンを挑発したのはこの男だ。

そしてこの学園の紹介があり、理事長はこの男。

何かの裏があると感じるのはごく自然な事だ。

「それは君をこの部屋に呼んだ理由と同じなのですがね。入学式の私の話聞いてました？」

実は全然聞いていなかった。

何故あそこに居るのか考えていて。

すぐに『暇だから』だろうとは思ったが。

内容は真剣に聞いていなかった。

「そりゃあ勿論、聞いていましたよねえ？　なんてったってアナタは、金冠の魔神煌月の息子なんですから」

「……………」　聞いてませんでした」

「……………」　おや？」

素直に告白すると、魔神は驚いたような反応だった。

その様子はかなりわざとらしい。

「聞いていなかった？　おやおや……………」　おやおや……………」

先程とは少し違う雰囲気ですや二やと笑う。

「君、アナタね、年上の話はちゃんと聞きなさいと言われたでしょう？　それともそんな事すら教えていませんか、金ぴかは？」

「教わりましたけど」

「にしては随分な態度ですねえ」

「……………」　母上から『紅のにはそんな遠慮など要らぬわ』と」

「……………」　おや？」

わざとらしく、顎に手を当てて。

「私はダメなんですか、まったくあのオカマは……………」

「父上の事は悪く言わないでください」

レイヴンが厳しい視線を向ける。

「いくら貴方でも、それだけは許せません」

「おや怖い」

しかし表情にそんな様子は見られない。

「なら言い方を変えましょうか。——あのふたなり、自分の子供の教育すら口々に出来ないんですか」

「変わってないじゃないですか……………」

大して変わった気がしない。

それに、ふたなりもオカマも事実とは違う。
そのどちらでもない。
どちらでもないのだ。
多分。

「まあ金ぴかが所々抜けているのは今に始まった事ではありませんからね。別にいいですよ」
それでもわざとらしく溜息。

「この学園は次世代に活躍する人材を育成する場所。ですが、同時に新たな勇者を見つける為でもあります」

「勇者？……伝説の？」

白虹の魔神を滅ぼしたという。

「ええ、その勇者です。白虹を滅ぼして世界を救ったという伝説を残した」

「……………」。どうして、同じ魔神を滅ぼした相手を見つける必要が？」

目の前に居るのは魔神。

滅ぼされたのも魔神。

同じ存在だ。

色は赤と白だが。

それでも同じ魔神に違いはない。

「何百年も前の事を持ち出してネチネチと言うほどの性格ではないのですがねえ？」

「でも」

「今から金ぴかが消えたところで何もみませんが、私は」

さりりとした物言い。
全く何も思っていないかのような。

「何千年も付き合っていれば消えても何かを言う必要を感じなくなるものです」

「……そういうものなんですか」

「少なくとも私はね。まあ金ぴかは情に強いですからねえ、良かったですね捨てられないかもしれないですよ？」

「……………」

嫌な事を言う。

相手は金冠の魔神。

何千年も生きている。

自分を拾ったのは間違いなく長い生の中の暇潰しでしかない。

どうして拾ったのか聞いた事はある。

『お前が金の髪していたからだ。あとはただの暇潰しよ』。

ただの暇潰し。

その暇潰しのおかげで今のレイヴンがあるのだから、感謝をするべきなのだ。

だが同時に思う。

もしも、飽きられたら。

捨てられはしないだろうか。

「勇者は白虹を倒し、その血を大量に浴びた剣を持っていた。その剣がこの学園にあるのです」

「……それとこれと、俺に何の関係が？」
目的がうつすらと見えてきた。

「剣は今、岩に突き刺さり、新たな使い手を求めています。岩から抜く事が出来た者こそが新たな勇者なのです。今まで誰も抜く事が出来なかった、今まで沢山の名の知れた生徒が挑み、やはり敗れた剣。……今日、勇者が誕生します」

「待ってください。 どうして俺なんですか。 俺でなくても抜ける奴は………」

「いいえ」

目の前に、いつの間にか現れていた。

瞬きをしたほんの一瞬だ。

誰も気付かなかった。

虚を突かれたレイヴンの両手を掴みやや強く握る。

やや高い背をレイヴンに合わせ、レイヴンの目を見る。

片方しかない、レイヴンの目を。

「これはアナタにしか出来ない事なのです」

何処までも深い紅。

抗う事を微塵も許さない、そんな瞳。

「アナタにしか……ね？」

強く、握る。

人間と同じ体温。

同じ皮膚の感触。

しかし相手は人間ではない。

人間より遥か上位の存在。

その笑みも人間臭いはずなのに、何処か恐ろしく胡散臭いものに見える。

「さあ、抜きにいくつではありませんか。　ねえ？」

誘いの言葉。

思考はクリア。

意識もしっかりしている。

身体におかしなところはない。

「……はい」

しかしレイヴンに逆らう事は出来なかった。
出来るはずが、なかった。

気付けばレイヴンは、静かに頷いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9277y/>

勇者は魔王で人間で？

2011年12月15日20時53分発行